

Kenneth F. Reid,

“FROM CHARACTER BUILDING TO SOCIAL TREATMENT”

—The History of the Use of Groups in Social Work—

黒 木 保 博

ケースワーク、コミュニティ・オーガニゼーションと共にソーシャル・ワーク実践方法論とされているグループワークの生成と発展について詳しく書かれた本はほとんど見当らなかった。これまでにグループワークの歴史について書かれた多くは、いわゆるグループワーク団体史であり、ソーシャルワークにおけるグループワークの発展に影響を与えた内的・外的要因に焦点をあてて詳しく書かれたものは見当らなかったと考えられる。グループワークの生成と発展のみで一冊の本にまとめられたのは、この本が初めてだと思われるだけにこの本の意義は大きく、グループワークを学ぶ者にとって興味をそそる内容である。

著者 REID, Kenneth E. はソーシャルワークの歴史の中で、実践者たちが「グループ」を活用してソーシャルワーク課題に取り組み、対象者にサービスしてきた視点からこの本を書いている。

著者はソーシャルワークにおいて「グループ」を活用してきた背景には基本的に三つの主要な「考え方」があったと指摘している。

第一には、小グループによって形成される価値観を民主主義社会の維持に活用しようとした「考え方」があったことである。地域社会での「決定」に際しては市民一人一人の役割が重要であり、そのためにはグループ行動を通じて養われる個人の「市民」としての望ましい価値観が期待されてきたのである。

第二には、個人の「社会化」の方法としてのグループ活用の「考え方」である。小グループ体験を通じて個人の発達強化され、グループ・メンバーは社会生活に必要な態度、価値観、思考方法、欲求などを学び、身につけてきたことである。

第三には、歴史的には最近のことであるが、グループを個人の

不適応行動を改善、修正するための治療的手段として捉える「考え方」である。個人の社会的逸脱は小グループを通じて規定されるのであり、自己破滅を導く行動の変化も小グループ活用による援助にて可能になる。

以上の三点の「考え方」は、そのままグループワークの生成と発展過程でもある。これらの共通点としては、これまでのグループワーク実践者たちは、人間生活とその環境とに基本的関心を共有していたことであり、すなわち、その時代の社会問題と密接に関連をし、人々の状況を改善するために「グループ」を意図的に活用したことであった。

この本は次の七章に分けられている。

- 1 The Age of Uncertainty, 1800-1915
- 2 A Pattern of Pieces, 1860-1899
- 3 Consolidation of the Pattern, 1900-1919
- 4 Formulation of a Method, 1920-1936
- 5 Expansion and Professionalism, 1937-1955
- 6 Winds of Change, 1956-1970s
- 7 The Past as Prologue

各章ごとに内容を簡単に紹介しながら学んだ点をあげてみたい。第一章においては、一九世紀のイギリス産業革命下において発生した社会問題（たとえば都市人口の急増による住宅不足、劣悪な衛生・水設備、スラムの発生などの生活環境の悪条件化問題、

あるいは貧困、失業、疾病、犯罪、非行などの生活不安問題）状況下において「グループ活動」を活用した運動と組織の誕生、そしてその展開について詳細に述べている。

著者はこれらの運動や組織をその目的によって次の五つの流れに分けている。

① 精神的目覚めのため（一八八四年設立された「トインビー・ホール」を中心とするセツルメント運動、あるいは一八四四年、G・ウィリアムズと同志たちのささやかな祈禱会によって誕生したロンドンYMCA (Young Men's Christian Association)、さらにはYWCA (Young Women's Christian Association)、「労働者階級の子どもを集めて活動したボーイズ・ブリゲード（一八八〇年）などがある」)

② 労働者教育のため（職人養成のための職人教育施設 (mechanics institutes)、「スラム街の子どもたちに読み・書き・宗教を教えた貧民学校 (ragged schools)」)

③ 愛国心高揚の運動のため（ボーイスカウト（一九〇七年）、ガールガイド（一九〇九年）)

④ 自助と相互扶助のため（数々の社会改良運動にみられる。中でも協同組合は一八四四年に始まっている）

⑤ レクリエーションのため（C・ペーカーが創立したボーイズ・クラブ（一八五八年）)

当時の社会状況に疑問を抱いた人びとが彼らの人道主義や宗教的動機によって立ち上り、いわゆる「理想国」の創造を目指した

グループ活動による運動と組織化であったことを紹介している。

これまで前記の①や③については、グループワークの始まりとして詳しく書かれてきたが、その他にも②、④、⑤、についてこの本は詳しく述べられており、当時のグループ活用が多方面に渡っていたことを教えてくれる。

第二章 A Pattern of Pieces, 1860-1899' そして第三章 Consolidation of the Pattern, 1900-1919. においては、アメリカ合衆国(以下、アメリカ)でのグループワークの萌芽期について述べらる。

周知のごとく、グループワークはアメリカにてソーシャルワークの実践援助方法論として確立するが、著者はその源流を次の四つに分けている。① セツルメント運動、② 「人づくり」としての青少年団体運動、③ 成人教育運動、④ レクリエーション運動、である。

この中で、著者はイギリスとアメリカのセツルメント運動の相違点について詳しく検討し、何故この運動がアメリカで開化して行くことができたかの理由を明らかにしている。

アメリカでのセツルメント運動は過酷な条件下での移民者の生活問題から出発し、イギリスの「個人の責任」強調よりは「個人をとりまく環境の変化」を強調し、ワーカーも「学生や男子」よりは「女性を含めた各方面」からの参加者を得たこと、セツルメント・ハウスが彼らの古い国と新しい国アメリカをつなぐための「中間施設」であったこと、アメリカのセツルメント・ワーカー

達が良き友人としてお互いに助け合うことと学び合うことを重視し、悩みをもつ人びとの相談相手になったこと、あるいは非行グループに積極的に接近し、彼らに数々のプログラムを提供していったこと。これらの理由からワーカー達はグループをあつかうための心理学や教授学の知識が必要となり、またボランティアやスタッフのトレーニングが行なわれるようになったことを述べている。しかし、次の第四章では、最盛期には全アメリカに四〇〇を数えたセツルメントが第一次世界大戦後に共産主義化を恐れる保守派の反動やその影響から派生してきた財政的問題にて衰退していき、コミュニティ・センターにその役割を譲っていく結末をも述べている。

セツルメント運動は、先述した「考え方」では「社会化」(あるいは再社会化)のためにグループを活用した典型的な例である。

②の「人づくり」としての青少年団体運動は、クラブやグループ活動が青少年の余暇の善用、非行・犯罪防止に効果的であり、他人と共に共通目標に向って活動すれば、正義、忠誠、愛国心、思いやり、信頼を学び、身につけることになる。国民に歓迎されたことによるのである。つまり、グループ活動体験が、人格の成長と健康な身体の発達をもたらし、そのことは先述した「考え方」の民主主義社会の維持に究極的には通じることとされたのである。

③の成人教育運動、たとえば、ライシウム運動、シャトール運動

動がグループワーク發達に重要な役割を果して来たことや、その学習が近隣の自発的かつインフォーマルな人々のグループで行われ、「草の根」民主主義社会に参加する能力をグループ活動で発達させたことになったと指摘している。

④のレクリエーション運動については、心から満足できるレクリエーションは人々の知的・精神的成長をもたらす結果になると、また非行・犯罪防止にも役立つことが認識されることになった経過を述べている。

以上のように、この時代のアメリカ人の人々の直接の生活条件の改善と問題解決の出口を探す方法としてグループの活用が盛んに行なわれたことを学ぶことができる。しかし、著者はグループの活用が「行動」のみに焦点が置かれ、背景となる「理論」にはあまり注目されなかったと指摘している。

第四章、Formulation of a Method, 1920-1936 ではグループワークが序々に理論的体系化される過程について述べている。理論的体系化されるに用いられた進歩的実践的教育学理論や社会学理論、あるいはグループに関する実証的研究による諸理論（ホーソン実験、ソシオメトリー、グループ・ダイナミックス）、あるいはS・フロイトの精神分析学理論がどのような影響を与えたかについて、詳しく述べており、数々の示唆を与えてくれる。また、それまでグループ活動を支えてきたボランティアではなく、組織の充実と運動の拡大をめざすために有給職員、有給指導者を採用するに至る経過、そのための高度な教育的養成と訓練の

必要性から一九二三年、ケース・ウェスタン大学社会事業大学院で最初に開講されたグループワーク・コースのことが述べてある。しかしながら、多くの社会事業大学院では、教育的価値がないと判断してグループワークをソーシャルワークの方法として認めていなかったのである。

一九二九年の大恐慌の影響から、一九三〇年代はグループワークはアメリカの未来を担う青少年を健全育成させる方法として脚光を浴びるようになった。この中で各種のグループ活動の指導者たちが日常の実践における共通の問題点や問題解決のための方法・技術についてお互いに協力して研究する必要性を感じ、一九三四年にリガナーにて研究会を開催するに至ったが、この集まりは二つの影響をもたらすことになったという。一つはこの参加者達の要求で翌年の全国社会事業会議にて初めてグループワーク部門が設置され、G・コイルのジュエグスレイ賞に輝いた論文やW・ニューステッターが最初の公式定義が明らかにされたことであり、もう一つは、参加者が中心となって一九三六年に研究のための協会として全国グループワーク研究協会を創立したことであった。

このように、以前のプログラム経験主義から、その活動における人間関係の重要性、あるいはグループワーク過程の意義、すなわち教育訓練を受けたグループワーカーの援助、グループにおける個人的相互作用などの重要性を認識するに至った影響過程を著者は豊富な内的・外的要因から述べている点は大いに学ぶべきこ

とであろう。

民主主義社会の維持や個人の社会化の考え方にてグループが活用された時代であり、また、この時期の後半には治療的視点からグループワーク活用が国内に序々に浸透し始めていたことを明らかにしている。

第五章 Expansion and Professionalism, 1937-1955 では、一九三五年の社会保障法成立によるソーシャルワークの発展、ケースワークの台頭と共に、第二次世界大戦などグループワークの発達に強い影響を及ぼした外的要因について述べている。また、様々の「所屬」論議を経て、ソーシャルワーク分野においてのグループワークとなり、専門職団体アメリカ・グループ・ワーカー協会の発足（一九四六年）の経緯について論じている。また、ソーシャルワークとしてのグループワークを確立する必要性のために出版された数々の理論書、教科書の特徴も紹介している。さらには、治療的グループワークが脚光を浴びてきた内的要因、一九五五年には他のソーシャルワーカー専門職団体と合同して全国ソーシャルワーカー協会を結成した経緯についても詳しく述べている。

第六章 Winds of Change, 1956-1970s では、これまでのグループワークの発展が、外的・内的要因からその方向性の再検討をせざる得なくなった経過について分析している。一九六〇年代前半の豊かな社会から六〇年代後半から七〇年代の急激な混乱期に陥ったアメリカの社会状況は国民のソーシャルワークへの期待

を増し、ソーシャルワークにおいても目標、実践、構造に大きな影響を与えることになった。しかし、序々に国民は増大し続ける政府の社会福祉予算支出額や貧困や人権差別など解決できない社会福祉問題に疑問を持ち始めたのである。ここにおいて、まず社会福祉教育カリキュラムが見直しを迫られ、マクロ的な視点をもつカリキュラムと方法論統合化が検討されたのである。

グループワークにおいてもさらにソーシャルワークの専門職としての性格を明確にするための作業が行なわれ、一九六四年には「準拠枠組」を明らかにした経過が述べられている。

方法論統合化の中では、一九六〇、七〇年代にはグループワークの機能の定義、グループの性質、原理と評価、ワーカーの役割等の相違からいくつかのグループワーク理論体系（モデル）が生まれてくる。これらのモデルに、役割理論、システム理論、行動理論、自我心理学理論などが積極的に用いられている現況について紹介している。

第七章 The Past as Prologue では、第一章から第六章までの整理をし、次の時代におけるグループワークはどのような機能をもつように変化していくかについて著者の意見を次の様に述べている。

①グループワークはその時代の特別なニーズに適するように、ある部分は強調し、ある部分は弱めながら社会の変化と共に歩んでいくにちがいないこと、②多様な問題やクライエント、状況に応じて、違ったアプローチが普及していくこと、③治療的グルー

プの活用がふえていくこと、④このことは、民主主義社会を維持していくために注目されてきたグループの活用の関心が序々に弱くなること、⑤ベア援助グループや相互援助システムとしてのグループの活用が発展していくこと。

以上、本書の内容を簡単に紹介してきたが、この本の特色は冒頭にも述べたごとく、ソーシャルワークにおけるグループワークの生成と発展について詳細に渡って書かれていることである。その時代／＼の人々のソーシャルワーク・ニードに対応して変化してきたグループの活用について、外的・内的な要因を詳細に明らかにしていることである。

グループワークを学ぶ者にとって、過去を学ぶことは単に因果関係を物知りに知るのではなく、現在の社会状況下におけるグループワークの果すべき役割と今後の予測をするために必要である。そのためにも、本書は多くの過去の整理と今後の予見を私に与えてくれた良書であった。

なお、私と本書との出会いは、一九八一年十月、ハートフォード市(コネチカット州)にて開かれた Committee for the Advancement of Social Work with Groups 及び Author Forum であった。著者 REID 氏が本書を書くに至った動機と内容を、さらにこの著書に対する自己評価について一時間に渡って説明をした。聴衆者は七名という小さな集りではあったが、その説明を聞いて、ぜひとも読むべき本だと思ったのである。

Kenneth E. Reid, "FROM CHARACTER BUILDING TO SOCIAL TREATMENT"